

# Unicornis captivatur

©Kenich Yamagishi

このテキストは、スイスのエンゲルベルク修道院に所蔵された「エンゲルベルク写本」に含まれる中世の歌である。(1400年頃に完成された。)この詩人は、キリストを、伝説上の動物ユニコーン(一角獣)・フェニックス(不死鳥)・ヒドラ(ギリシア神話の海蛇)で象徴している。また、ペリカンにキリストの受難を重ね合わせている。

Ola Gjeiloは「テキストの持つカラフルで力強い象徴主義、純粋なドラマ、勝利の喜び・感情に大いにインスパイアされた」と書いているが、彼の出版した楽譜に書かれている英訳はだいぶ誤訳な感じだ。以下は、山岸がラテン語辞書と格闘した結果の逐語訳である。(もちろん完全ではないが。)

1.

Unicornis captivatur,

一角獣は 捕らえられた(captivo,受)

ユニコーンは捕らえられ

Aule regum presentatur

中庭に 王たちの(複,属) 披露された(praesento,受)

王宮の中庭に引き出された

aule = aulaの与格aulae

Venatorum laqueo,

狩人たちの(複,属) 罾で(laqueus,対)

狩人たちの罾で

Palo serpens est levatus,

杭,棒 蛇は be動詞(3単現) 上げられた(上げるlevo,完了分詞=受)

蛇は竿の上に上げられた。

Medicatur sauciatu

癒される(3単現,受) 傷つけられたのを(saucio = 傷つく、未来分詞,受動態)

傷が癒されるために

Veneno vipereo.

毒(venenum、与格) 毒蛇の(形容詞vipereus,与格)

毒蛇の毒による

後半「palo serpens est levatus」以下の訳は、楽譜に載っている英訳がおかしい。

「LATIN DISCUSSION」という英語のサイトのページ(<http://latindiscussion.com/forum/latin/palo-serpens-est-levatus.25198/>)でも、その英訳をあげ、それに疑義があるとの論議がなされている。そのページで、これは聖書の記述を下敷きにした表現である、と書かれている。

まず、旧約の民数記21:9には「モーセは青銅で蛇を造り竿の上に上げた。蛇にかまれた者は、その青銅の蛇を仰ぎ見て生きた。」とある。それをうけて、ヨハネ福音書3:14-15に「モーセが蛇を上げたように人の子も上げられなければならない。それは彼を信じる者が、全て永遠の命を得るためである」とある。(ちなみにその直後の3:16に「Also hat Gott die Welt geliebt..」、3:18に「Wer an ihn gläubet..」と続く。)

というわけで、serpensがイエスのことを表していることは明白だ。

Alleluia canite, Agno morienti, アレルヤと歌え、死せる子羊に。  
cano(2複,命令形) 子羊に(与) ←死せる(morior現在分詞moriens = 形容詞,与格)

Alleluia pangite, Alleluia promite アレルヤと合意し表明せよ。  
pango(合意,同意する) promo(表明する)、いずれも2複,命令形

Leoni vincenti. 勝利のライオンに。  
ライオンに(与) ←勝利の(vinco現在分詞vincens = 形容詞,与格)

「pango」「promo」には、どちらも多くの意味があるが、英訳に見られる cry の意味は無い。

## 2.

Pellicano vulnerato  
ペリカンに(与) 傷つけよ(vulnero2単・3単,未来、命令形)

ペリカンを傷つけよ。  
(そうすれば、その血によって?)

Vita redit pro peccato  
命が 蘇る ~のため 罪(peccatum,奪格)

命が蘇る。 罪のために

Nece stratis misera,  
死(nex,単,奪) 道(複,与) 哀れな(形容詞,奪)

地上で哀れな死をとげた

ペリカンは、律法では食べてはならない汚れた鳥とされている。(レビ記11:13-18、申命記14:12-17)。

またペリカンは人里離れた荒野を好むので、そこから古ラテン語聖書ヴルガータにおける詩編101:7の「私は荒野のペリカンのごとく..」との記述となる。(現在の詩篇では102:7にあたり、ペリカンではなく「みみずく」と訳されている。) ペリカンは自らの血で子を養うと考えられており、そこでこの詩編のペリカンはイエスのことであると教父たちによって解釈されている。

vulneratoは未来時制の命令形であるから、「傷ついたペリカんに(命が蘇る)」という訳はおかしいと思う。

Phos fenicis est exusta,  
不死鳥のの(Phoenixの属格phoenicis) 不死鳥の輝きは焼き尽くされ、  
輝きは 不死鳥のの(Phoenixの属格phoenicis) 焼き尽くされた(exuro,完分=受)

Concremanturque vetusta  
焼き払われた(concremo, 3 複現,受 + que~と = et) 古い(vetustus,形,n.複.主)

そして焼き払われた。 古い

Macrocosmi scelera.  
大宇宙の 罪(n.複.主)

世界の罪は

Phosはギリシア語で「光・輝き」。「Phos fenicis」で「不死鳥の輝き」と訳した。

Concremanturqueの語尾の「-que」は「et」である。よって、「不死鳥が焼かれた」、「そして」そのことにより「古い罪も焼き払われた」と訳した。フェニックスの死を、イエスの死と同様に「贖罪の犠牲」と解釈しているのである。

### 3.

Idrus intrat crocodillum, ヒドラはワニの身体に入り込み

ヒドラは 入り込む(V3s現) ナイル大蜥蜴(crocodillus)

Extis privat, necat illum, その内蔵を奪い、それ(ワニ)を殺し、

内蔵を 奪う(V3s現) 殺す(V3s現) それを(ワニ)

Vivus inde rediens; 生きてそこ(ワニの体内)から戻った。

生きて そこから 戻った(分詞=returning, return=reddo)

訳はこれで問題ないと思う。しかし、この詩のストーリーの出典がわからない。

crocodillusをラテン語英語辞書オンラインで調べると、Nile monitorと出てきた。ナイル大蜥蜴、すなわちクロコダイル科のワニである。ワニの世界分布を調べると、アリゲーター科が南北アメリカと中国なのに対し、クロコダイル科は東南アジアからインド、アフリカ低緯度地域に広く分布しており、エジプト南東部にもいる。しかし、聖書の舞台である地中海東岸からメソポタミアやアラビアにはいない。もちろんギリシアにもいない。

一方、ギリシア神話のヒュドラーは、巨大な胴体に9つの首を持つ大蛇の姿をした化け物である。不死身の生命力を持っており、9つの首のうち8つの首は倒すことができるが、すぐに傷口から新しい2本の首が生えてきたとされる。加えて中央の首は不死だった。しかし最後はヘラクレスによって退治された。

こんな化け物がワニの身体に入り込めるだろうか？ ちなみに現実に存在する淡水産の腔腸動物ヒドラは体長1cmなので、これならワニの身体にも入り込めるか。

Tris diebus dormitavit ライオンは3日間眠り続けた。

3 日(3複,与格) 眠る(V3単完了形)

Leo, quem resuscitavit 彼(ライオン)を呼び起こすまで

ライオンは (関代)を 生へと呼び戻す(V3単完了形)

Basileus rugiens. 王が大声で

王が 叫んで(rugio叫ぶ,現在分詞)

3日間眠り続けたライオンとは、言うまでもなく、3日目に復活したイエスのことである。